

過ぎ去りし日の郷愁と残滓 昭和40年代男の屋根裏部屋 アナログオーディオ を直す、の巻

文と写真 増田 清

今や音楽を聴く方法はデジタル方式で圧縮された電子データが主流。だが、昭和40年代男たちが思春期を過ごした1980年代は、日本のオーディオ界が絶頂を迎えた時代。その音はどんなものだったろう。

'80年代オーディオブーム

音楽を聴くことも楽しむことも好きという趣味人は多い。昭和40年代男たちなら経済のこころ押し寄せてきた洋楽、アイドル全盛時代を迎えた歌謡ポップスなどに親しんでいた。同時期国内のオーディオ産業は空前のブームを迎え、現在のデジタル機器が日進月歩を続けるのと同じように新機軸追求、高性能化を遂げた。

そんな時に思春期を過ごした昭和40年代男から、嫌でも耳が肥える。書店にはオーディオ専門誌がズラリと並び、最新機種のレビューが掲載される。読めれば読むほど物欲が刺激され、親に買ってもらえない時代はパブルに向かつて右利きになり、ステレオくらしい父ちゃん無茶しちゃうぞと高級オーディオを導入する家庭も多かった。

そんな音を聞いて育ちは音質の良い耳を開き分ける耳が備わる。だが、時代はCDの登場で、一気にデジタル化へ突っ走る。今や父に主流となり、果てはデジタルソー

スになってしまった。

ところが、同じ音源をデジタルマスタ処理したCDで聴くよりも、アナログ音源で聴くほうが良いに聴こえるのはなぜか。理論上ありえないのだが、事実そう感じるのだから仕方がない。だからいまに1980年代製のオーディオが愛用されているのも、同時に先日子アトデックがウンとムーンとも言われてきた。後アム引かれつつ大量のカセットテープとともに粗大ゴミとして出してしまう。

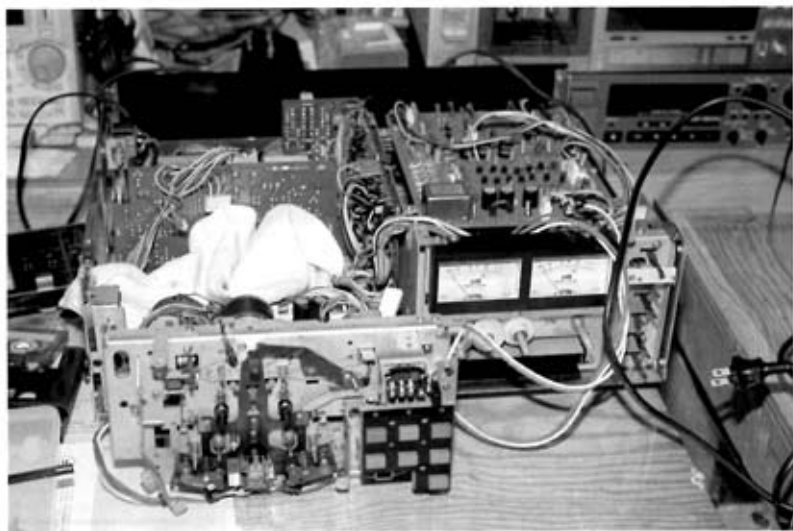
音質はアナログが上?

だが、今何語れたCMJさんで話を聞けば、その程度の故障なら簡単に直るといふ。CMJさんは壊れたオーディオ機器の修理が主業務。対象はAV機能も導入される以前のオーディオ機器で、残念ながらカーオーディオなどは対象外だが、昭和40年代男たちが愛用した機材なら、大抵の修理が可能だ。

話を聞こう。80年代に登場したメタルテープ対応カセットデッキは、現在のCDより高音質だったという話まで飛び出した。「CDの周波数特性は20キロヘルツまで、メタルテープは30キロヘルツまで録音、再生が可能ですよ」。CDだから音がよいというのは迷信ですよ」と語ってくださったのは同社取締役の岩瀬勝一さん。長年オーディオを販売する現場で働いた知識は音響家さんが。

さらに、「80年代のアンプはトランジスタを採用しているの、修理には高時と同じことが必要です。コンデンサーは規格品ですから今でも普通に交換できます」とメンテナンス事業部長の青木功さん。青木さんはソニーのオーディオ開発部門で働いていたエンジニアだ。

だが、コンデンサーを交換すると音が変わってしまうのでは? という質問には「厳密には変わりますが、それを聞き分けることができる人はほはいないでしょう」といふ。人間の耳は非常にファジ



●取付に対応してくれたメンテナンス事業部長の青木功さん。ソニーの技術者だったこともあり、手馴れた知識は一流。プロの技でなんでも直してしまおう。



●青木さんが現在修理しているのはMaxonという高級スピーカー。コーン紙の一部が裂けてしまったため修復している。



●専用の検査用を用いて裂けたコーン紙を貼り合わせている。これまでJBLの名機、パラゴンの修理経験もあるという。



■CMJ

●昭和の時代
に作られたオ
ーディオ製品
なら機種を問
わず修理してく
れる。プレー
ーやアン
プの修理代は
基本持帰りが
1万2000円
で、その上
に修理
工数(2300円/1h)と部品代
が必要。必ず電話してから訪問
してほしいとのこと。

〒321-0825 埼玉県さいたま市
北区柳町2-493-3
048-661-5101
http://www.cmj.co.jp

CMJ
ウインターオーディオ
修理工房
TEL 048-661-5100

■アンプ修理

●ユーザーが入らない、音がでないなどのトラブルには、まず内部を洗浄して徹底的に導通テストを行う。トラブルの原因を探るところから始まるのだ。



●80年代製のアンプに数多く用いられているトランジスタは汎用性が低く機種ごとに専用部品が採用されている。そのためCMJでは部品取りを大量にストック。



●こちらは昭和30年代製アンプのステレオ。修理にいくらかかるかわからないが、金額の相場ではないと持ち込まれた。きつと悪いのが詰まっているのだらう。



●CMJでは修理した高級オーディオ機器を販売することも視野に入れている。現品も実演的に音場を再現しているが、まだ本格スタートではないとのこと。



●お昼休みに向かえば修理した製品を視察させてもらえる。こういうオーディオルームが欲しいという昭和30年代男子も多いのではないだろうか？

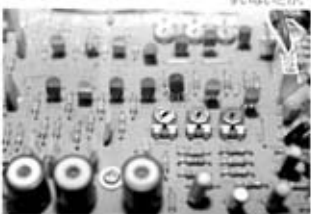


電気製品に対するアレルギーがなく、手先の器用さを見せる人であれば自らチャレンジすることも可能だろう。だが、そうではない筆者のような人であれば、丁寧に頼ってみたい。

■カセットデッキ修理



●タイトル写真と同じカセットデッキ。指を置いている部分を押すと裏のステータスが動いてテープをエジェクトする。ステータスが割れると一大事になるそうだ。



■レコードプレーヤー修理

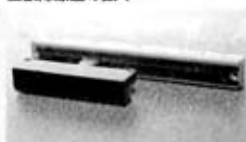


●プレーヤーの場合、モーターまで壊れているケースはほぼない。多くはターンテーブル駆動のゴムバンドやアーム駆動の不具合。オートリターン装置は注意。

●修理に持ち込まれたプレーヤーはカートリッジと反対側のアーム先端に駆動部の部品が割れていた。リジリングの部品も取替するのだが、苦肉計しろ。



■故障原因の数々



●ポリウムやトーンコントロールの部品はこのようなタイプが多い。スライドする内部にホコリが溜まり経年により抵抗が増え導通しにくくなる。



●ボタンスイッチの場合、内部のスプリングやプラスチック自体が割れてしまうこともある。また接触部の金属が経年を置いていたため、分解清掃が必要。



●カセットテープを回すリールの駆動に用いられるゴムバンド。1970年代製は耐久性が高かったが、80年代に素材が変わり写真のように割けてしまうことが多い。



●ゴムバンドが割けてしまった場合、専用工具では材質の悪い代替品が手に入る。メーカーや機種により使うサイズが異なるので、このように大量にストック。

「1年もので、レコードとCDの音の違いを聞き分けるところまで、微細な音の違いまではわからない。」
 「こんな話を聞けば聞くほど、80年代に生まれたオーディオを愛してみたくて。実際、日本メーカー製でも部品や組み立てを国内メーカーで現行技術で精しむと、80年代に国内メーカーが技術を惜しむこともなく製作した製品と比べるべくもないレベル。直すより安いから」と安易に買い替

'80年代な修理可能